

【会長賞：中学生の部】

「祖父と全盲のおじいさん」

山口県・周防大島町立大島中学校
3年 神戸 華子 さん

祖父の友人のそのおじいさんは、生まれた時から両目が全く見えません。祖父とは若い頃から仲が良く、いつも電話で楽しそうにパソコンや無線機の話をしています。数年前までは一人でバスに乗って訪ねて来られたそうで、何事にも前向きでアクティブな全盲のおじいさんを、祖父も私も大変尊敬しています。

そんなおじいさんの家のパソコンを、祖父が修理に行った時の話に、私は震える程感動したのを思い出しました。夕方、薄暗くなった部屋で説明書を読んでいた祖父が、そろそろ字が読みにくくなったので、電気をつけてもいいか？とおじいさんに尋ねた所、おじいさんは「気が付かなくて申し訳なかった」と言い、部屋の電気をつけてくれたそうです。そして、おじいさんは冗談半分に笑いながら一言、祖父に向かってこう言ったそうです。

「目が見える人は不自由じゃのお」

私は、自分の心が震えるのが分かりました。そして思わず「格好ええなあ!!」と叫んでいました。祖父もその時、なるほど!!と納得し、「わしらは見えんかったら何も出来んのお」と2人で大笑いしたそうです。障害を乗り越えて普通の人と変わらない位、普通の生活をしている全盲のおじいさんのその一言に私はとても大きな余裕を感じました。

私達は障害のある人に出会うと、少なからず大変だなあと同情してしまいます。特に障害者と関わる機会が少ないと余計に構えてしまう事もあると思います。私も少し前まではそうでした。障害のある人々を私達と別の世界の人だと思い込んでいたのは、その人達の事を知らな過ぎたからでした。

中学1年生の冬に、学校の授業やイベントで多くの体の不自由な人達と一緒に楽しい時間を過ごした事がありました。みんな前向きで明るく、そして私達中学生をととても温かく迎えてくれたのです。その時私達は、年齢も性別も関係なく、とても多くの人々と友達になる事が出来ました。私がある時一番強く感じた事は、お互いがお互いの事に興味を持てたという事です。

「愛の反対は憎しみではない。無関心だ!」と言ったマザー・テレサの言葉が、ジグソーパズルのパーツの様に、その時の私の気持ちにぴったりとはまった気がしました。

無関心とは、改めて考えてみると、とても寂しい言葉だと思いました。最近の悲しいニュースのほとんどが、この無関心から始まっている気がします。友達やクラスメイトにいじめられて一人ぼっちになる事も、誰とも関わろうとせず、誰にも知られないまま孤独死してしまうのも、この言葉が引き金になっていると思います。障害の有る無しに関わらず、誰もが自分の事に無関心でいられるのはつらいはずです。私達が率先して障害者の方々とコミュニケーションを取る事も大事ですが、私は障害者の方々にも是非、積極的に色々な所に参加し、大勢の人と関わって欲しいと思います。目の見える人は不自由だと笑ったあのおじいさんの様に。

祖父は、そんな全盲のおじいさんをととても尊敬していると思います。いつも前向きで、好奇心の塊の様な人なので、祖父もふとすると、おじいさんの目が見えていないという事を忘れてしまうのでしょうか。今日も電話でパソコンの画面の説明をしていました。

「右下の方に、赤いアイコンがあるじゃろ？」

私は、笑いをこらえながら心の中で祖父に突っ込みを入れました。(おじいさんに、赤い色って言っても分からんじゃろ?)

祖父の気の利かない説明の向こうで、おじいさんは今日も優しい顔で一生懸命、赤いアイコンを探そうとしているはずです。そして私は、障害者も健常者も関係なく、お互いをリスペクトしている 2 人のどこまでも噛み合わない会話を聞きながら、いつまでも元気で長生きして欲しいと思いました。